

戦争体験

曾武川 政雄（大正9年生まれ）

あのころ日本人の三大義務として、兵役の義務、納税の義務、教育の義務があった。

当時、満20歳になると徴兵検査を受け、均衡のとれた体と健康上の問題がなければ、甲種合格となり兵役に服した。私はそのころ満州国撫順炭鉱総務局に勤務していたので、そこで徴兵検査を受け甲種合格となった。

昭和15年12月、高田市にあった歩兵連隊に入隊するよう通知を受ける。入隊の数日前から家の入り口には竹でアーチが組まれ「祝入営」の掲額がなされた。入隊当日には近隣、近親者が饞別を持って見送りにきてくれ、みなで神社に武運長久を祈った。私は挨拶の中で「お国の為に命を捧げます」と決意を述べたことを覚えている。

歩兵連隊での訓練は厳しかった。3か月後には外地部隊に配属されることになり、翌年4月、中国大陆に向け大阪港を出帆した。

南京市外に到着、小休止のあと漢口に移動、ここからは最前線の宣昌（揚子江沿岸）までトラック輸送となった。日産の2トントラックは時速50kmで走る。窓ガラスにガラスが何度かぶつかった。揚子江をはさんで宣昌の市街地、対岸に歩兵第五十八連隊の本部があり、周辺の間には各中隊の陣地が構築されていた。

昭和17年12月、第13師団の再編にあたり、私の所属する歩兵第五十八連隊は僚隊と別れ南方転進のため、翌18年1月27日呉淞港を出帆した。2月10日シンガポールに上陸、約4ヶ月のマライ半島警備を終え、雨季でどろんこ道のタイ・ビルマ国境を通過、7月12日には釈迦の寝像があるペゲーに到着した。

太平洋戦争もこのころには、南方各地で英米軍の反撃に遭い、特にガダルカナル島では撤退の時機を誤り、多数の死傷者が出た。そんな状況の中、第31師団（含、五十八連隊）、第33師団、第15師団の3か師団を統括する第15軍司令官牟田口中将は、無謀ともいえるインパール作戦を強行すべく計画していたのである。

第31師団はインドのコヒマを占領すべく、19年3月ビルマ北部からインドへ侵攻、峻険なアラカン山脈を踏破して作戦を開始した。3か師団約7万の日本軍が、インパールの英印軍を殲滅するというのである。そして食料、弾薬の輸送は山岳地帯で困難なため、敵の放置した倉庫から調達する作戦なのだ。それでも兵の背囊は食料、弾薬等で45～6kgの重量があった。それを背負って2～3,000メートル級の山を上り下りし、10日ほどかけて敵の軍用道路にたどりついた。

敵兵とも遭遇するようになり、当初、戦闘は有利に展開したが、敵は日毎に兵力も重火器も増強してきた。対する日本軍は不十分な軍備に加えて兵力の消耗が激しく敗色が濃厚になっていく。5月半ばには食料は10日分を残すのみとなり、師団長は軍司令官に速やかな補充を要請したが「まだ肉弾があるだろう」玉砕を強要した。

こんな折、私と名立町出身の塚田隆太郎が連絡任務のため陣地を離れた直後、敵の迫撃砲弾が私の直前で炸裂し右大腿部の肉片がもぎ取られた。師団長は遂に食糧基地まで撤退することを決

意、部隊はその期日を6月4日と決定した。それにはまず傷病兵を野戦病院へと後退させねばならない。歩行困難な者、片手、片足のない者など助け合いながら後退した。三中隊の中隊長は敵陣へ突撃した際、右耳から左耳へ貫通銃創の重傷を負ったので担架で担がれている。野戦病院にたどりついた私も医療品がなく、蚊帳を細かく切ったものをリバーノール液で浸し、傷口に当て三角巾で保護する程度だった。

6月の空は雨季となり毎日雨だった。三中隊の戦友、田中伍長、笹川兵長と3人で歩いたが、夕方になると2人分の天幕を屋根にし、床は高くして周りに排水溝を作り一人分の天幕を敷いて雨を凌ぎ野宿した。米3合と飯盒1杯のご飯で1週間歩き通し、塩気のない日が20日も続いた。蛇も田螺も犬も食べた。雨の中、道端に多くの傷病兵が倒れている。「がんばれ」「飯はあるか」と助け合おうとするがどうにもならない。アラカンの山中でどれほどの人が命を落とすのだろうか。私自身も必死の思いで、マンダレイ近くの野戦病院に辿り着いたが、そこにも食糧はなく、病に冒された人々の集積場に過ぎなかった。

そこを出て後、高田出身の宮腰軍曹に出会い、中隊の駐屯地が近くにあることを聞き向かった。途中トラックの荷台に乗せてもらおうとしたが、乗り込む体力がなく、近くにいたビルマ人に押しあげてもらった。中隊に合流して次第に体力が回復したので生き延びることができた。第58連隊の戦闘はその後も続き犠牲者はさらに増えた。

私は戦死者の事務処理や、遺骨送付の手続きなどしていたので本体と離れて行動した。遺骨といっても戦死者の小指を切断し、飯盒炊爨の火を利用して火葬したものである。しかしその印ばかりの遺骨さえ遺族の元へ帰らなかったのである。

昭和20年8月中旬、敵の飛行機からビラが撒かれた。「戦争終結、安んじて次の指令を待て」日本語で印刷されたビラである。直ちに理解できなかったが、広島原爆投下の話も伝え聞くなど、時間が経つにつれ終戦の想いがつのってきた。

私の命の恩人の宮腰軍曹も戦死した。内地へ引き上げるとまず彼の留守宅を訪ね、戦地の様子を報告し仏壇に手を合わせた。

インパール作戦に参加した3か師団、約7万名の兵士のうち3万6千余名が、アラカン山中に残された。彼らは靖国神社で逢おうと誓い合った戦友達なのだ。私は幾度となく死線をさまよいつながりながら生かされ、今なお生きている。あれから60余年、国家繁栄の旗のもと犠牲となった戦友を想う時、ただ哀悼の意を捧げるしかできないもどかしさ。

戦争は無益だ。子ども達に戦争の愚かさを伝えていくことが、残された自分にできるせめてもの鎮魂の祈りと思っている。